コラム

武笠秀也
（国労東日本本部調査部長）

先輩からの教えを思い出す

賃金交渉が大詰めになっている。事務所の入り口の壁に組合員の切実な声と激励が多数張り出されているのを毎回見ながら交渉に臨んできた。調査部長になって３年、毎年の賃金アンケートを集約して、切実な組合員の声を会社にぶつけてきた。毎回交渉していて思うのは、会社の答弁である。「経営環境が厳しい。先の見通しがつかない」などを繰り返す。交渉しながらふと思う。会社はどうゆう状況なら、我々の声を聞き、反映するのだろうと。闘いしかない。それも職場の声をもっともっと私自身が聞き、会社にぶつけるのと同時に職場の運動を活性化させるしかないと思う。かつて先輩から「職場に目を向け、迷ったら職場に聞け。視野を広く持って、どんなときでも交渉の場と思って臨め」と教えられた。事務所の激励文を見るたびに教えられる。かつて、職協役員をやっていたとき、現場こそ実践の場、調査なくして要求の前進はないと多くの職場に足を運んでいったが、それが薄れているのだろうか。自己反省の日々が続く。運転外注化、設備メンテ見直し、信濃川発電所体制見直し、乗務員勤務などなど、

課題は山積みだ。足踏みしてる暇はない、職場に足を運ぼう、組合員に学ぼう。日々勉強と調査はまだまだ続く。

話はかわるが、陽気も良くなり暖かくなってきた。春の真鯛のノッコミの時期も近い。幾つかの地方委員会に今年はおじゃましたが、休憩時間の雑談の時に結構海釣りをやっている組合員の多いのがわかった。中には船を持っている組合員もいると聞く。是非一度手合わせをお願いしたいものだ。今年は幾つかの要求前進と組織拡大で大漁旗をなびかせるためにも一層の奮闘をせねばと思う今日この頃だ。